

季刊  
じぱ

Renewal

新デザインでスタート！  
実務者に響く情報発信を  
強化していきます

本誌はWeb上でもご覧いただけます。  
Web版へのアクセスはこちらの二次元コードから。



「東山動物公園 - たぶんうめ」 photo by 株式会社大塚製薬工場 西山彩史 氏

理事's eye

「JIPA理事としての視点」  
「知財部門のリーダーとしての視点」  
2つの視点で深掘りする知財業界の今

上野 剛史 Takeshi UENO  
日本知的財産協会 専務理事



わが社のこだわり

「株式会社シマノ」  
「ころ躍る製品」を  
お客様にお届けする

宮川 敦史 Atsushi MIYAGAWA  
株式会社シマノ  
開発戦略部 知的財産チーム 次長



実務スポットライト

【特許第1委員会】  
生成AIは中間処理対応に  
どこまで活用できるのか？

藤川 誠二 Seiji FUJIKAWA  
日本バーカライジング株式会社  
技術管理部 知的財産グループ



JIPA通信

2026年度  
JIPA研修のご案内



## 立場の変化で見えてきたJIPA

私はこれまで、会員企業（日本IBM）の知財部門に所属する立場で、JIPA活動に参加し、理事として協会の意思決定にも携わってきました。現在はJIPA事務局に身を置く専務理事として、協会運営を支える役割を担っています。

同じJIPAに関わり続けてきましたが、立場が変わるにつれて、その見え方も変わりました。

会員企業の立場では、研修や会誌「知財管理」、委員会・ワーキンググループの活動を通じて、専門的な知識を体系的・継続的に学び、自社の考えや経験を共有する貴重な機会でもありました。

知財部門をマネジメントする立場としては、メンバーが本業と両立しながら委員会

活動で他社の知財担当者と切磋琢磨し、成長していく姿を目にしてきました。JIPAは、実務における判断の軸を養い、リーダーシップを培う場でもありました。

ただ当時は、こうした経験を主として個々の成長として捉えており、それらが協会全体としてどうつながり、社会に影響していくのかまでは、十分に意識できていませんでした。

次に、理事として協会の意思決定に関わる立場になると、JIPAを少し広い視点で見えるようになりました。理事は委員会等の活動を支援しつつ、理事会では最新の知財動向を踏まえ、JIPA全体としての方向性を定めていきます。個社の立場を意識しながらも、担当する委員会等での

議論を踏まえ、最終的にはJIPA全体、さらには産業界を見据えて意思決定を行い、発信すべき内容を判断する責任を担う立場だと感じるようになりました。その責任を最も強く意識することになったのが、2013年度に理事長を務めた経験です。理事長として、一般社団法人化やWIPO GREENの公式立ち上げ、職務発明制度の改正など、その後のJIPAや産業界に大きな影響を与える出来事に関わる機会となりました。

理事会での判断一つひとつが、JIPAの信頼や対外的評価に直結することを実感し、JIPAが日本企業の知財の声を社会に届ける役割を担っていることを改めて認識するようになりました。



## 「JIPA理事としての視点」 「知財部門のリーダーとしての視点」 2つの視点で深掘りする知財業界の今

上野 剛史 日本知的財産協会 専務理事  
Takeshi UENO

## 立場を超えて変わらずにあるJIPAの価値

専務理事は、理事の中で唯一、会員企業ではなく事務局に所属する立場の理事です。JIPAを代表するのは会員企業から就任する理事長ですが、専務理事として、理事会の方針のもと、協会運営の執行を担う立場にあり、対外的な対応や発信に関わる場面もあります。

専務理事として活動に携わる中で、個々の活動のつながりをより意識するようになりました。委員会やワーキンググループ、業種別部会、地域協議会、研究会などの活動は、一つひとつは独立して見えても、全体としてつながり、日本企業の知財活動を支える基盤を形づくっています。

会員企業の現場の課題を受け止め、それが理事会での議論に反映され、具体的活動へ展開されていくよう支えることが、専務理事としての重要な役割だと考えて

います。そのため、中立的な立場を大切にしながら、これまでの蓄積を生かして対話を促進し、各種活動が会員企業にとってより実りあるものとなるよう取り組んでいます。

こうした役割や立場の変化を経る中で、どの立場でも共通して大切であると感じるようになったJIPAの価値もあります。

それは、JIPAという場を通じて、知財実務者一人ひとりが学び合い、刺激を受けながら成長し、その学びが人と人とのつながりを通じて広がっていくことです。研修や会誌、委員会や部会などの活動、さらには理事会での議論に至るまで、会員自身が主体的に関わりながら知見を深めていく。こうした「互学互習」は、JIPA設立当初から受け継がれてきた伝統であり、今も変わらぬ基盤です。

そして、その価値は個人の成長にとどまり

ません。JIPAで培われた視点や課題認識、そして信頼関係は、各会員が自社に戻った後の実務や対話の中で活かされます。そうした学びや経験は、日々の業務の中で具体的な行動や提案へとつながり、社内外での議論や連携を通じて、最終的には経営の判断や戦略形成を支える力へと発展していきます。その積み重ねは、企業活動を通じて社会にも波及していきます。

こうした取り組みを通じて、知財は企業の中核でより戦略的な役割を担うようになります。JIPAは、その土台を支える場であるとともに、企業の実践を社会へとつなぐ存在でありたいと考えています。

この思いを形にする取り組みの一つとして、この春号から季刊じばをリニューアルしました。会員に刺さる情報発信をより強化していく予定ですのでご期待ください。

## わが社のこだわり [株式会社シマノ]

「こころ躍る製品」を  
お客様にお届けする

宮川 敦史 Atsushi MIYAGAWA

株式会社シマノ  
開発戦略部 知的財産チーム 次長

シマノは大阪府堺市に本社を置き、1921年の創業以来、「人と自然のふれあいの中で、新しい価値を創造し、健康とよろこびに貢献する」という使命のもと、「価値創造企業」さらには「開発型デジタル製造業」を目指して技術革新を重ねながら、自転車・釣り・ロウイングの分野で「こころ躍る製品」をお客様に提供し続けてきました。2021年には創業100周年を迎え、当社使命を象徴化したトリコロールライン(ライトグリーン:大地、ブルー:空、ディープブルー:海)を取り入れてコーポレートブランドロゴを刷新し、次の100年に向けて歩み始めています。同時に、「もっと自然へ、もっと人へ」というタグラインのもと、自然をフィールドとする製品を提供する企業として、持続可能な社会の創造に向け、環境対策や地域貢献のための活動も積極的に進めています。

## こころ躍る製品を

シマノは、ロードバイク用コンポーネント最上位モデル「DURA-ACE」に代表される自転車部品、およびスピニングリール最上位モデル「STELLA」に代表される釣具、の2つを主たる事業の柱としています。当社は単にサイクリングや釣りの道具を作るのではなく、宝飾店のショーウィンドウに並べても決して引けを取らないような、お客様に見て、触って、所有する喜びを感じていただける「こころ躍る製品」を提供し続けることをビジョンとして掲げています。



DURA-ACE



STELLA

また、当社は自転車ロードレースの大会「シマノ鈴鹿ロード」や釣りの大会「シマ

ノジャパンカップ」等のイベントを毎年開催し、お客様に自転車・釣りを楽しむ機会を提供するとともに、自転車・釣りの文化振興および社会的価値向上に努めています。



シマノ鈴鹿ロード

そして、当社では社員の自転車通勤を奨励しており、堺本社の社員の約4割が通勤手段として自転車を登録しています。また、自転車通勤手当、約1,000台の駐輪場、通勤での汗を流すための入浴施設等の環境が完備されています。2022年には、国土交通省より、自転車通勤を積極的に推進する「自転車通勤推進企業」の宣言企業認定を受けることができました。



自転車通勤者のために整備された環境

## 事業を守り、戦略を提供する

当社の知財活動は至って基本に忠実で

あり、特許による技術保護、商標によるブランド保護を通じて事業に貢献していますが、当社では海外売上比率が90%以上を占めるため、海外での知財活動に重点を置いています。例えば、特許では、日本で出願せずUSやドイツで第一国出願を行う場合があり、当社の戦略的特許活動の典型となっています。また、商標では、海外での模倣品対策に力を入れており、ECサイト監視等のオンライン対策はもちろんのこと、中国での摘発、インドネシア税関登録等のオフライン対策も積極的に行っています。当然、海外代理人や海外グループ会社との密な連携が必要となり、知財メンバーには高いスキルが求められますが、それが仕事のやりがいにも繋がっています。

一方で、事業部への戦略の提供という点ではまだ物足りない部分があり、知財分析やAI活用等にも今後力を入れていきたいと考えています。

## JIPAとの関わり

JIPAでは、関西金属部会で他社知財関係者と交流・情報交換を行ったり、「明細書の書き方」等の研修に参加したり、当社にとって大変貴重な「学びの場」になっています。当社では若手・中堅の人材育成が喫緊の課題であり、今後も知財メンバーの成長の機会をご提供いただけることを期待しています。

# [特許第1委員会] 生成AIは中間処理対応にどこまで活用 できるのか？

藤川 誠二 日本パーカライジング株式会社  
Seiji FUJIKAWA 技術管理部 知的財産グループ



## AIによる特許図面の読み取りとクレーム補正についての検証

本シリーズでは、会員企業の関心の高いトピックについて実務視点で参考となる情報をお届けします。

第1回の本稿は知財業務への生成AI活用に関し、2024年度特許第一委員会第4小委員会が「生成AI(特にChatGPT)は特許の中間処理対応にどこまで活用できるのか?」を検討した成果の概要を纏めました。

詳しい報告内容は知財管理2026年1月号掲載の同委員会の論文をご覧ください。

### 検討の概要

従来のChatGPTでは、文字(テキスト)情報の入出力が中心でしたが、GPT-4.0Vからは画像認識が可能となりました。本検討では明細書の図や表を入力情報として、非テキスト情報の活用について、中間処理対応のシーンをモデルとし、機械・ソフトウェア・化学の3分野を対象に検証しました。結果の概略を表1に示します。

### 得られた知見

「プロンプトで図の概要や着眼点(位置・形状など)を明示する」、「図面→明細書の順で入力して図面情報を優先的に

処理させる」等の工夫により、図面の読み取り精度が向上するといった知見が得られました。一方、「複雑な図表は読み取り精度が低い」、「同じ入力をしてでも出力結果が変わる(一定しない)場合がある」、「補正案における表現の変化により新規事項追加の懸念がある」といった課題も確認されました。

### 結論

現状、生成AIの出力結果がそのまま実務で使えるレベルには至っていませんが、適切な前処理とプロンプト設計により、図表の解析に基づく有用な出力が得られる可能性が示唆されました。今後の技術進化とさらなる活用法の検討が期待されます。

表1 検証結果の概略

分野	検証内容	結果の概略
機械分野	プリンタ構造図面	<ul style="list-style-type: none"> <li>図面の読み取り: 突起の位置等を正しく認識。</li> <li>相違点の抽出: 本願と引用文献の図面を比較し位置・形状等の違いを抽出。</li> <li>クレーム補正案: 抽出した相違点を基に新規性欠如の解消に十分な補正案を生成。</li> </ul>
ソフトウェア分野	UI画面(遷移)	<ul style="list-style-type: none"> <li>UI図の読み取り: 画面遷移やアイコンの形状変化を認識。</li> <li>クレーム補正案: 新規性に貢献する構成を含めた補正案を生成。</li> </ul>
化学分野	乳化組成物成分表	<ul style="list-style-type: none"> <li>表の読み取り: 画像形式の表から成分と配合量を正確に抽出。</li> <li>クレーム補正案: 引用文献の成分を除外し新規性を確保する補正案を提示。</li> </ul>

## JIPA通信 2026年度JIPA研修のご案内

JIPA定例研修2026年度は、**新規講座の開講**や地域での**受講機会拡大**など、より多様なニーズに応える改訂を行いました。

まず、関西での集合研修を強化します。「**特許実務基礎(B01)**」を初めて関西で開講するほか、「**知財契約実践(C05)**」、「**特許事例の研究(討論形式)(E07)**」、「**本質を考えた発明説明書の書き方(G3S)**」など複数講座が関西初開催となります。

新規講座としては「**欧州特許基礎セミナー(初級)**」を開講します。昨年の米国特許基礎セミナーに続くもので、グローバル知財

戦略に求められる基礎知識を網羅的に学べる講座です。

改編としては、「**企業視点、国内中間処理戦略(D18)**」を従来4日→3日コースに凝縮し、4日目を新規事例紹介と質疑に特化した拡大版とし、4日目のみの受講も可能とし、柔軟な活用を狙います。

会員企業の皆さまの実務に寄り添い、学びやすい2026年度のJIPA研修に、ぜひご参加ください。



## アンケートのお願い

機関紙「知財管理」および「季刊じば」へのご意見をお寄せください。下記からアンケートにご回答いただいた方には、抽選で記念品を贈呈いたします。

表紙写真も募集しています。お手元に「これぞ!」というお写真をお持ちの方、ご連絡お待ちしております。

### ■回答方法

右下の二次元コードまたはURLから回答フォームにアクセスしてください。

■締切:2026年6月30日(火)  
記念品抽選結果の発表は発送をもって代えさせていただきます。



<https://forms.office.com/r/y6JCsVazas>



季刊じば Vol.37  
SPRING 2026  
2026年4月15日発行

編集人: 一般社団法人 日本知的財産協会 会誌広報委員会  
発行人: 一般社団法人 日本知的財産協会内 上野 剛史  
<https://www.jipa.or.jp/official-publication/jipa-quarterly>  
印刷&DTP: NPC 日本印刷株式会社